

# 農業の新しい技術

No.583 (平成20年 7月)

分類コード 02 - 02

熊本県農林水産部

## 二条大麦「はるしずく」の 小麦と作業競合しない安定栽培法

農業研究センター 農産園芸研究所作物研究室

担当者：春口真一

### 研究のねらい

近年、熊本県での大麦栽培において、オオムギ縞萎縮ウイルス 型による被害がみられ、その対策として、精麦、醸造適性に優れる「はるしずく」を採用した。現在、「ミサトゴールデン」からの切り替えが進み、県内大麦作付の50%を超える作付となっているが、「はるしずく」は、既存の「ミサトゴールデン」に比べ成熟期がやや遅い特性があり、乾燥調整施設での小麦受け入れとの競合が懸念される。そこで、小麦、大麦生産地域での乾燥調整施設の効率的稼働に配慮した播種適期を明らかにする。また、「はるしずく」の収量・品質の高位安定をねらいとした施肥法を併せて確立する。

### 研究の成果

1. 小麦作付地域での共同乾燥調整施設の効率的稼働を考慮した場合、小麦との成熟期差が4日以上あることが望ましい。また、11月上旬～中旬の早播では凍霜害、過繁茂による減収の危険性がある。以上のことから、播種期は11月5半旬から12月2半旬が適当である(図1、2)。
2. 最適播種期の11月6半旬播種において、慣行の2月上旬に加え3月上旬に各0.2Nkg/aの追肥を行うことで慣行追肥に比べ収量は高くなる。また慣行2月上旬に0.4Nkg/aの1回施用でも同等の効果が得られる(表1)。
3. 窒素追肥の増施により原麦タンパク質含有率はやや上昇する傾向にあるが、9%前後であり醸造適性に影響するほどではない。(図3)。

### 普及上の留意点

1. 播種量は、11月5半旬の播種では0.4～0.6kg/a、11月6半旬以降では0.6kg/a程度とする。
2. 本試験は、水稻後黒ボク土壌において行った。

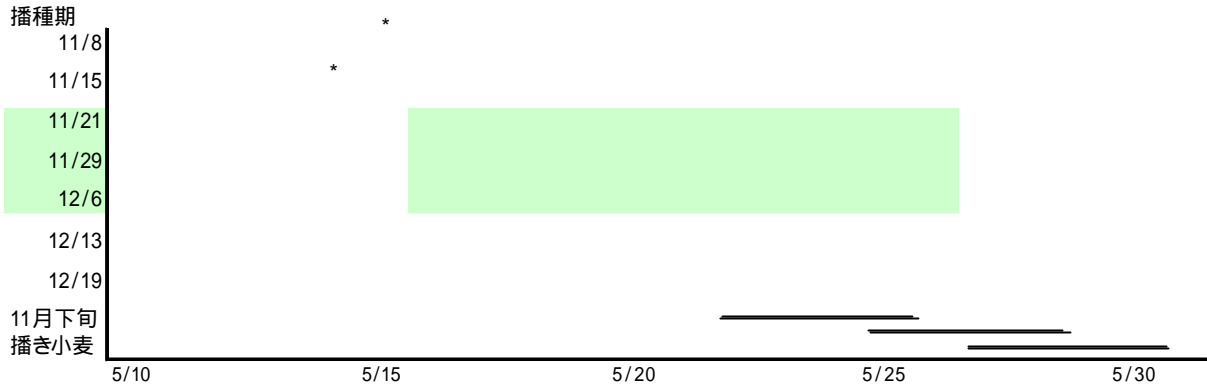


図1 播種期と成熟期

注1 2004年は、2005年は、2006年は、\*は凍霜害が大きかったものを示す  
 注2 小麦成熟期の横棒は成熟期から4日前までを示す

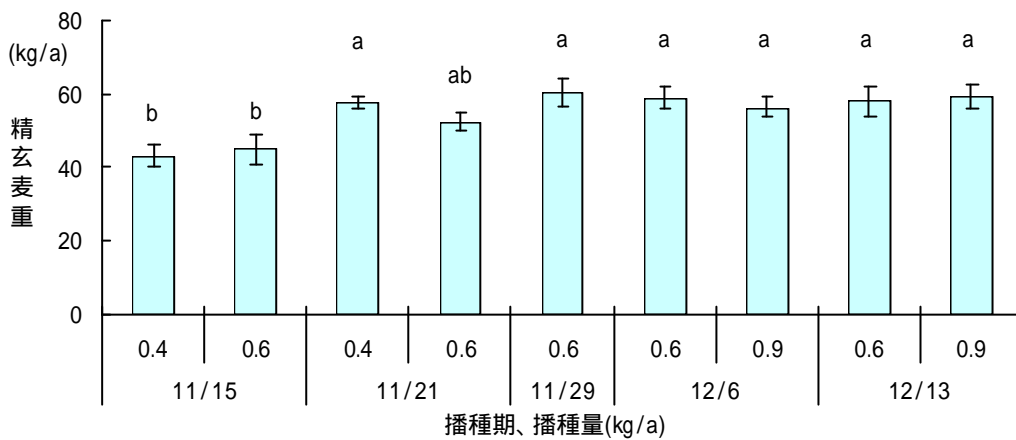


図2 播種期、播種量が精玄麦重に及ぼす影響

注1 2006、2007の平均。図中の同一文字間には5%水準で有意差なし。  
 注2 基肥 0.6Nkg/a、追肥 0.2Nkg/a

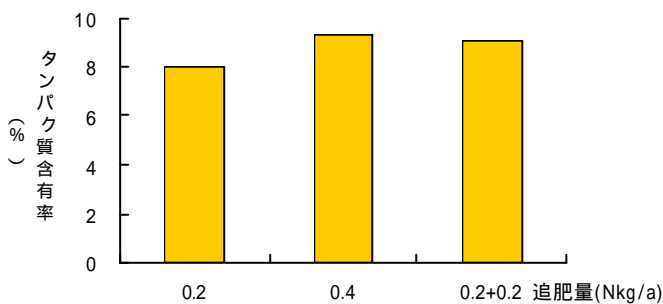


図3 追肥がタンパク質含有率に及ぼす影響  
 注)11/21,11/29播種の平均 (2007産)

表1 追肥法の違いと収量・収量構成要素

追肥量 (Nkg/a)	最高莖数 (本/m <sup>2</sup> )	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	1穂粒数 (粒)	千粒重 (g)	容積重 (g/L)	精玄麦重 (kg/a)	同左比	検査等級
0.2(慣行)	800	391	22.9	48.1	714	60.3	b	100
0.4	835	454	23.3	48.6	718	67.7	a	112
0.2+0.2	789	423	23.1	49.2	701	64.3	a	107

注1) 2006、2007年産の平均、播種量は0.6kg/a、条間30cmの条播

注2) 播種期は11月29日

注3) 検査等級は1(1等上)~6(2等下)~7(規格外)とした

注4) 同一文字間には5%水準で有意差なし

注5) 基肥は0.6Nkg/a、追肥時期は2006年産(2/10,3/24)、2007年産(2/8,3/9)